

## 香酸柑橘シークワサー生産の現状

相原貴之・後藤一寿  
(九州沖縄農業研究センター)Takayuki Aibara and Kazuhisa Goto :  
Present Situation of "Siquasa" (Okinawa Traditional Citrus Fruits) Production

## 1. はじめに

シークワサーは元々沖縄本島北部を中心に自生している柑橘であるが、栽培されるようになった後も加工原料価格の低迷のため放任に近い状態が続いていた。近年、その健康機能性成分等から注目され、価格が上昇したことにより、生産者の栽培意欲が高まっているが、その生産の実態は明らかにされていない。そこで本報告では、既存文献、統計データ、関係機関・生産者からの聞き取り調査等に基づいて、シークワサー生産の現状把握を試みる。なお、本研究は農水省委託課題「沖縄対応特別研究2期「沖縄北部地域における特産果実の健康機能性に着目した高付加価値化のための利用技術の開発」(2004-06)中の1課題に基づいている。

## 2. シークワサーの特徴と栽培の経緯

## 1) シークワサーの特徴

沖縄本島を中心に広く分布している小果の柑橘で、独特の香りと食味がある。酸性土壌を好み、沖縄では本島北部の山の斜面に多く自生している。樹は大変丈夫かつ長寿で放任園でも手入れをすれば復活し、また樹齢100年を超える樹もある。1964年頃から経済栽培されるようになった。ただし、柑橘の中でも隔年結果性が強く、この低減も課題になっている。シークワサーは品種名ではなく総称であり、全部で200個体以上あるとされているが、栽培されているのは数種類である。

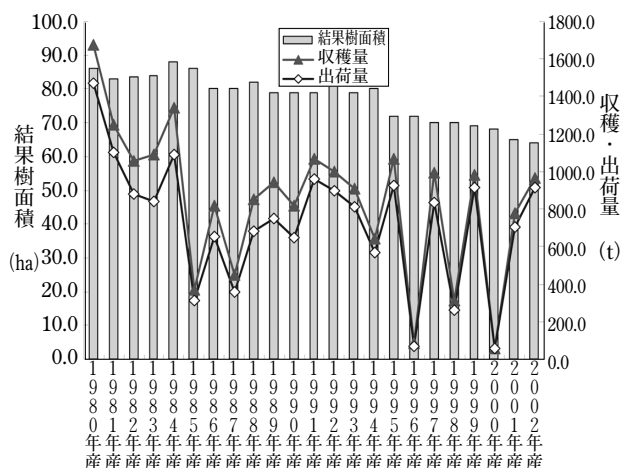
## 2) 大宜味村におけるシークワサー栽培の経緯

大宜味村は山林が76%で平地が少なく、国頭マージのため土壌は酸性である。これらのことから作物が限定され、当時の村長の奨励によりシークワサーが栽培されるようになった。村にあったパン加工工場を利用して1964年から本格的にジュース製造が開始された。しかし、1980年頃から原料価格が低迷し、栽培放棄につながった。その後も原料価格は50-60円/kgと回復せず、収穫されない果実が樹に負担をかけるようになり、1996年から隔年結果現象が極端に現れてきた。

1998年に果実にノビレチン等の健康機能性成分が多く含まれていることが明らかにされ、2000年にマスコミで取り上げられたこと等から注目され始め、シークワサーは品薄・高価格となっている。現在の加工用価格は200円/kg +  $\alpha$ である。このため農家の栽培意欲が高まり、施肥等の栽培管理を行うようになってきた。

## 3. 大宜味村におけるシークワサー生産の推移

シークワサーは大宜味村、名護市が中心産地である。特に大宜味村は2002年産北部収穫量の67%を占める。次いで名護市が28%であり、両市村で北部全体の95%を生産している。第1図に1980-2002年産の大宜味村シークワサー生産量等を示した。1980年産の1,677tをピークに、1990年頃からは極端な不作年を除き900t程度で推移している。ここでは1996年、1998年、2000年の極端な不作-前年産の1割に満たない-が注目される。これは収穫放棄による樹の負担にレモンビハムシの発



第1図 大宜味村におけるシークワサー生産の推移  
資料：園芸・工芸農産物市町村別統計書（沖縄総合事務局）

生等が重なって発生したと考えられている。結果樹面積も減少傾向にあったが、2002年の64haから現在70ha程度にまで回復している。これは新植ではなく、放棄園地の復活による。つまり大宜味村の結果樹面積の減少は伐採や品種更新によるものではなく栽培放棄であったと考えられる。

## 4. 生産にかかわる課題

まず、生産者の高齢化がある。後継者がほとんど育っておらず生産者の高齢化が進んでいる。大宜味村におけるJAシークワサー部会所属の在村生産者87名の平均年齢は69.2歳である。最も多い年齢層は70歳代で25名、次いで80歳代が20名である。

次に密植と高樹高化による作業性の低下がある。樹高4-5mに達すると収穫作業等にはしごを使わなければならない、作業性の低下とともに危険性が増大する。

最後にブーム後の栽培・経営体系および支援体制の確立がある。現在の加工用価格は200円/kg +  $\alpha$ である。 $\alpha$ はJA、業者等が原料を集めるための上乗せ分である。いずれ価格低下が予想されるが、低下を最小限に抑え、その価格で継続生産できる技術体系・支援体制の確立が求められる。

## 5. おわりに

以上からシークワサー生産の現状について次の3点が明らかになった。第1に、健康機能性成分の発見、テレビ番組報道等によるブームによって、放棄園地の復活というかたちで生産が回復している。第2に、後継者が育っておらず、ごく近い将来、担い手不足になる恐れがある。第3に、多くの集荷業者が入っており、JAの集荷力が弱い。つまり、近年生産量は上昇しているが、園地・樹の改善、担い手の充実、価格の保証がなされておらず、不安定な生産条件下でブームの影響を受けているのが実態と考えられる。